2022年11月17日発行
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター　52号
http://www.jsics.org/

日本国際文化学会事務局
龍谷大学国際学部松居研究室内
〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67
Tel:075-366-2223
Email:
jsics@world.ryukoku.ac.jp

第21回全国大会を終えて

第21回全国大会　実行委員長　岡田 浩樹（神戸大学）

第21回全国大会は、対面式と一部オンライン参加をあわせたハイブリッド形式で7月9日・10日の両日、神戸大学で開催されました。神戸大学大会のテーマは「人の移動、文化の移動―世界から宇宙へ」であり、国際文化学にふさわしい様々なテーマの発表が行われました。まずは、神戸大会実施事務局を代表して、研究大会の円滑な運営にご協力いただいたことに感謝申し上げます。不透明な状況の中、今回、対面形式の研究大会を実施できましたこと、ひとえにご参加いただいた会員の皆さま、様々なサポートをいただいた理事会の方々のご理解の賜です。

２１世紀前半のパンデミックとして、おそらく歴史に刻まれるであろう、COVID-19拡大はいまだ完全に終息したとは言えない状況にあります。今回の感染拡大は、２０世紀後半からのグローバリゼーションの影の部分を私たちに如実に示したといえましょう。それは人の移動や交流が促進され、世界的な感染拡大にいたったという表面的な現象だけではありません。マクロレベルでは、グローバル企業の経済的影響力を高め、国家間の格差、国民国家のリバイバルなどが顕在化しました。一方でミクロレベルでは、社会内の格差を顕在化し、同時に人々は「主体的」に自己規制し、日常生活も変化を余儀なくされました。今回のCOVID-19感染拡大で、グローバル化する世界のありようと個々の私たちの関係をあらためて再考することが求められたといえましょう。

神戸大学大会では、自由論題８セクション、24件の研究発表、3件の共通論題、「地域社会の国際文化：『歴史総合』を機に考える神奈川の地域史」、「文化と大衆―文化の『大衆性』と『多様性』」「アドボカシー・デモクラシー・多文化共生　国際文化学からみた高橋良輔の学問的意義」と、発表テーマの多様性に「国際文化学」の可能性が示されております。加えて「学会20周年記念事業」のフォーラム、開催校企画として二つのシンポジウム「国際文化学の今日―移民と多文化共生」「国際文化学の現在と未来―世界から宇宙を考える、宇宙から世界を考える」を開催しました。

21世紀の大きな課題である移民と、ITコミュニケーションなどグローバル化を支える宇宙開発をテーマとした国際文化学の視野の広さを示せたと思います。特筆すべきは、大学院生交流会、理事交流会、情報交換会がいつも以上の盛り上がりを見せたことです。オンラインの利便さを知る一方で、やはり2年ぶりの対面のコミュニケーションがアカデミアにとって重要であることを再確認させられた貴重な機会でした。

アカデミアの活動である「学会」も例外ではありません。学会の活動の柱は学会誌と研究大会における研究成果の発表です。研究大会は、研究成果の場だけでなく、face to faceでのコミュニケーションの空間として大きな役割を果たしてきました。COVID-19感染拡大を契機として、オンラインの会議や研究会、SNSという新たなコミュニティの出現、ITコミュニケーションの拡大などにより、従来のアソシエーション的な学会コミュニティの在り方も再検討を迫られているのかもしれません。

シンポジウムは二つとも大盛況でした！

第22回全国大会の開催に向けて

鈴村 裕輔（名城大学）

日本国際文化学会の第22回全国大会は、2023年7月8日（土）、9日（日）に愛知県名古屋市に所在する名城大学外国語学部で開催する予定です。

過去21回の全国大会は首都圏のほか、北海道から沖縄まで各地の大学で開催されてきたものの、これまで中部地方と四国地方では実施されてきませんでした。学会として最初の中部地方における全国大会が名城大学で挙行されることは、一人の会員としても、大学としても大いに喜びとするところです。

今回、名城大学外国語学部が全国大会の開催校の大役を担うことになった直接の契機は、馬場孝前会長からのお声がけでした。すなわち、2019年4月に私が着任して間もなく、当時会長であった馬場先生からご連絡をいただき、名城大学での全国大会の開催の可能性を打診されたのでした。

このとき、新しい任地で学内の状況も十分把握できてはいませんでした。しかし、2018年に名城大学外国語学部がグローバル人材育成教育学会第6回全国大会を開催したという話題に接していたこと、さらに日本国際文化学会の全国大会を初めて中部地方で開催するという学会の裾野の拡大という点からもぜひとも名城大学で行いたいと、馬場先生からのご提案をありがたく引き受けました。

こうして、2020年度は近畿大学、2021年度は神戸大学、そして2022年度は名城大学と第20回から第22回までの全国大会の開催地が決まり、私も3年後の大会に向けて学内の調整に取り掛かりました。

しかし、2020年1月に始まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大により2020年度は全国大会の実施を中止し、開催地はそのままに実施年度を1年度ずつ繰り下げることが決まりました。これを受けて名城大学での全国大会は2023年度へと延期され、今日に至っています。

さて、名城大学外国語学部は、体験重視型学習を通して、「グローバル社会に求められる英語力」「国際理解」「実践力」の3つの力を養成することを目指して2016年に設置され、2019年度に完成年度を迎えた、新しい学部です。

前身の名古屋高等理工科講習所が1926年に開設され、1949年の大学設置を経て、現在は10学部9研究科からなる、中部地方最大の大学である名城大学は、2026年に開学100周年を迎えます。

名城大学外国語学部は開学100周年に向けた全学的な国際化の推進と国際的な水準を身につけた人材の輩出のための中心的な役割を担う学部として、研究・教育活動を行っています。私は、前任地である法政大学国際日本学研究所で取り組んできた研究活動や留学生に対する教育などが評価され、全学を横断する「国際日本学プログラム」の策定や運営の統括などを担当しています。

第22回全国大会は、東西の日本の中間点に位置し、それぞれの文化や習慣が浸透し合い在来の要素と混淆されることで独自の姿を見せる中部地方の魅力と、国際的な視点での研究・教育活動の推進に注力する名城大学、とりわけ外国語学部の取り組みの成果を会員の皆様にご紹介する格好の機会となります。

来年7月に、皆様をお迎えできることを、今から楽しみにしております。

次回全国大会
2023年7月8日、9日

共通論題・自由論題の応募をお待ちしております。

【共通論題】締切：2022年12月31日［土］必着
【自由論題】締切：2023年3月20日［月］必着

大会実行委員会：zenkokutaikai2023@gmail.com

平野健一郎賞受賞者紹介

朱琳氏（仙台高等専門学校助教）が第12回平野健一郎賞を受賞され、第21回全国大会で表彰式が行われました。
受賞論文は「戦時期日本における中国白話文学の受容―松枝茂夫訳『思痛記』とその背後」です。

第12回平野健一郎賞をいただきまして、深く感謝を申し上げます。

平野健一郎先生の『国際文化論』に出会ったのは2016年であり、東北大学国際文化研究科で博士論文を執筆していた最中でした。私は日中文化交渉史を研究しており、当初から文化触変論に大変興味を持っていました。と同時に、異文化交流の視点から見れば、文化触変論にはさまざまな変形、可能性が潜んでいるのではないかと感じました。今回の受賞論文は、文化触変論の可能性を開拓し、国際関係の多様性を見出す作業の一環とも言えます。

思えば、人類が15世紀の大航海時代から大海原に乗り出してから、地球規模の文明交渉が始まりました。地球の一体化は未曾有の刺激を人間社会にもたらし、それによって、技術・経済・価値観の更新は絶えずになされてきました。しかし、このような異なる文明圏の交渉史の裏には、植民地支配をはじめ、価値観・世界観の押し付けなども生み出され、少なくとも20世紀半ばまでの長い間に、強者による弱者の支配、「先進―未開」のような二元対立論が「国際社会」の原理として存在していたのではないかと思われます。しかし、白黒をつけるような二元対立的な見方から脱出しないかぎり、国際社会をより「平等」、より「平和」の方向へ導くことに対して、我々はすでに限界を感じたのではないでしょうか。

そこで、二元対立的な視点を打開するために、文化史から国際社会のつながりを再発見することは重要であると思います。本回の受賞論文で取り上げられた『思痛記』は戦後日本でようやく単行本として世に出されたが、それは単なる一つの白話文学として日本に紹介されただけでなく、戦時中の言論統制を抵抗する役割も果たしました。戦時中の日本と中国の間に、文化交流を介して「対立―協調」を超越したつながりが確認できたというのは、今日の国際関係の多様性を見出す希望になることを切に願っています。

コロナが流行してから3年目となります。この3年間、断絶、閉塞、対立を味わい、混乱していく状況の中に、日に日に増していく危機感を抱きながら生きてきたような気がします。それでも、希望を失ってはいけません。

むしろ閉塞的な時代だからこそ、歴史/文学/芸術/…など、あらゆる文化様式から生きていく希望を見出す責務は、人文学者にあるのではありませんか。今後も、この初心を忘れずに、どんな状況でも心を奮い立たせて、邁進していきたいと存じております。

最後に、長い間、私の研究生活で多くのことを教えてくださった恩師の方々、本論文について大切なご意見を寄せた学友、日本国際文化学会の先生方と先輩方、そして、長年私の研究生活を支えてくれた家族に、心より深謝を申し上げます。

授賞式の朱琳氏。感動をありがとうございました。

私の研究歴―会員紹介

本号では植 朗子会員にご寄稿いただきました。
口承文芸から『鬼滅の刃』まで、幅広くも一貫したご研究の足跡をご覧ください。

植 朗子（神戸大学研究員）

「私の研究履歴」というテーマをいただいて、これまでの研究について振り返る機会をいただきました。私は大学卒業後に一度就職したことがあり、数年間働いたのちに大学院に入りました。そのため皆さんよりも研究者歴は短いと思います。大学では『宇治拾遺物語集』をやり、大学院に入ってからはおもに日本とドイツ語圏の伝承文学を研究対象とするようになりました。伝承文学といえば、神話・伝説・メルヒェンですが、私の専門は伝説（Sage）で、グリム兄弟の『ドイツ伝説集』を中心に研究しています。

ただ、私の名前で検索していただくと、マンガ『鬼滅の刃』（吾峠呼世晴、集英社）の作品解釈の記事が最初にヒットすると思います。「伝承文学研究者がなぜマンガ解説を？」とよくご質問いただくのですが、私の研究の関心は一貫して「怪異」にあります。神話的物語、迷信、言い伝えなどの、モティーフと話型研究をやっており、映画・マンガ・アニメ・小説など現代の諸作品における伝承文学的なモティーフ等の分析をしています。

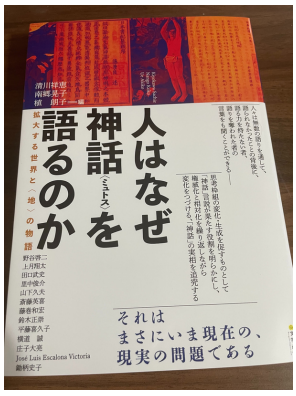
もともとポップカルチャーに関する記事を書いていたわけではないのですが、『鬼滅の刃』の解釈記事を書かせて下さいと、雑誌『AERA』のwebサイト「AERA dot.」（アエラドット）にお願いしまして、素晴らしい担当編集者の方と出会い、2020年12月から不定期連載をはじめて、今に至ります。一般読者向けの記事ですから、読後感を重視して「読みもの」になるような工夫をしています。ですが、伝承文学研究をベースにすることから外れないように気をつけています。熱烈な“鬼滅ファン”の方からたくさんのご感想をいただいていますが、記事がきっかけとなって、伝承文学に関心を持つようになったと言っていただけるのが、とてもうれしいです。研究の道に入って良かったなと思えた出来事の1つでした。また、日本のポップカルチャーに関する研究活動から、日本国際文化学会の入会に至り、お声がけ下さった会員の鈴村裕輔先生に感謝しております。

「AERA dot.」の連載記事を単行本化したもの。『鬼滅夜話 ―キャラクター論で読み解く『鬼滅の刃』』（扶桑社、2021年）

伝承文学に関する研究では、現在「植物の迷信」をテーマに、植物を使った民間療法とそれにまつわる伝説を調査中で、2022年9月にヴュルツブルク大学医学史研究所、ハイデルベルク薬事博物館に行ってきました。

（左）植物の伝承関係の本。ヴュルツブルク大学医学史研究所図書館所蔵。
（右）ハイデルベルク薬事博物館。

古い伝承に記録されている薬草に、現代医学から見てどれくらい薬効が認められるのかを調べてきました。植物に対して人々が希求しつづけてきた「治癒」への願望と科学の発展の痕跡を紐解いていきたいです。「植物」「人体」「民間療法」「治癒」「迷信」というキーワードでしばらく研究をしていく予定です。



清川祥恵・南郷晃子・植朗子編『人はなぜ神話〈ミュトス〉を語るのか：拡大する世界と〈地〉の物語』（文学通信、2022年）。植物の迷信と科学の発展をテーマにした章を担当。

偶然なのか、これも必然なのか、今回の調査を通じて、『鬼滅の刃』のある植物モティーフについて、新たな解釈を発見しました。またどこかで発表できたらと思っています。

第21回全国大会　発表要旨

【共通論題1】地域社会の国際文化：「歴史総合」を機に考える神奈川の地域史

加藤 恵美（代表）、藤田 賀久、中山 拓憲、都丸 潤子（討論者）

この共通論題では、神奈川をフィールドとして定め、国際文化的なプロセスである地域史について検討した。副題にある「歴史総合」は、文部科学省がこの2022年度に高校レベルに導入した歴史科目であり、いわゆるグローバル・ヒストリーの観点を高校レベルの教育に取り入れる試みである。この試みに対する研究者の関心は高く、著名な研究者たちが、「歴史総合」のあるべき姿を提案するようになっている。

国際文化学は、国境や文化を越えて移動する人、モノ、アイデアなどの接触と変容を主たる研究関心としてきた。そのため、国際文化学の観点から、「歴史総合」のあるべき姿を論じることもできる。しかしこのパネルの目的は、それを行うことではなかった。この「歴史総合」の導入を機に、地域社会の国際文化を地域史として書いた／書こうとしているさまざまな人びとの姿を捉えて、考えることにあった。

はじめに藤田賀久が「地域の「世界史」を見つける試み：『神奈川から考える世界史』から見えてきたこと」と題して、自らの編著書である『神奈川から考える世界史：歩いて、見て、感じる歴史』（えにし書房、2022年）を紹介した。本書は、高校と大学で歴史を教える教員の共著書である。藤田によれば、「意図せずして」神奈川に残るアジアの戦争の跡が捉えられることになった。

次に、『神奈川から考える世界史』の出版プロジェクトに参加した中山拓憲が「一（いち）高校教員が高校で探究を行うことについての期待と課題」と題して、「歴史総合」などの時間を通じて歴史学的な「探究」活動を行うことについての課題を示した。中山からは、「より密度の濃い高大連携」の必要性が提起された。最後に、加藤恵美が「川崎市桜本地区「まちがミュージアム」プロジェクトの検討」と題して、まちに残る植民地支配と差別の歴史の跡を地域史として残す市民活動の現状と課題を報告した。市民活動の高齢化と次世代継承が課題として指摘された。

３つの報告に対して、イギリス帝国史が専門で「高大接続」活動にも積極的に取り組んできた都丸潤子から、質問とコメントがあった。そのうち、本共通論題のタイトルにある「地域社会の国際文化」とは何かという質問に対しては、3人の報告者からそれぞれに見解が示された。その後会場の4人の会員から、地域社会に注目するという国際文化学の方法、学生・生徒のリアクション、歴史科目入試における「高大接続」、国際移住者でないマイノリティ（下層労働者など）の地域史における位置付けなどに関する質問とコメントが提出され、関連する報告者が応答した。本共通論題の参加者の皆さまに、代表者としてこの場にお礼を記したい。

【共通論題2】文化と大衆――文化の「大衆性」と「多様性」

鈴村 裕輔（代表）、植 朗子、飯森 明子（コメンテーター）

文化は人間の生活にかかわるあらゆる事象であり、ある集団の文化は他の集団との交流、交渉なしに存在し得るものではない。また、集団内のどのような階層が担い手となるかにより、ある事象が「高尚な文化」とされ、他の事象が「大衆的な文化」と見做されることがある。このとき、「大衆」とは「為政者」や「貴族」といった「上層階級」に対する「下層階級」としての「庶民」や「民衆」の文化を意味しない。むしろ、ある文化の高尚さや大衆性は固定的ではなく、政治的、経済的、社会的、宗教的な要因などにより枠組みを超えた移動が生じる。また、集団外の別な集団との接触、交流により文化のあり方そのものが変化することも珍しくない。その意味で、文化の持つ流動性を検討することは、ある時点では「高尚」とされる事項が「大衆的」となり、「大衆的」であった事象が「高尚」となることを明らかにする試みでもある。今回、われわれはこのような問題意識に基づき、報告とコメントを行った。

鈴村裕輔会員による報告は「幕末維新期の日本における文化接触とその影響」と題し、欧米の文物が体系的に導入された幕末維新期に焦点を当て、各種のスポーツが外国人によってもたらされた中で、何故ベースボールが最も早く普及・定着するようになったかを検討した。その際に手掛かりとなったのは、ベースボールがホーレス・ウィルソンによってもたらされたとされる1872（明治5）年という年であり、学制の施行による近代的な教育制度の導入、鉄道の開通によるヒトの移動の範囲の拡大、さらに現在まで続く主要新聞の創刊という3つの出来事とベースボールの関係が継続して指導するものの重要性が示された。

植朗子会員による報告は、「大衆文化としての民間伝承の受容―『鬼滅の刃』竈門禰豆子の「口」をめぐる不思議」という論題の下で、吾峠呼世晴の漫画『鬼滅の刃』の重要な登場人物である竈門禰豆子に注目し、議論が進められた。すなわち、口枷をはめられるという設定は物語の展開の点で重要であるだけでなく、口枷を破壊しないという点に竈門禰豆子の意志の強さや人間性を示し、言語を喪失することがその幼さや守られるべき存在となったことを象徴すること、さらに主人公・竈門炭治郎の真の成長をもたらす出来事としての意味を持つことが、モティーフ分析や話型分析といった伝承文学の研究方法を活用して明らかにされた。

2件の報告を受け、飯森明子会員はある文化の発展に必要な「メディア」や「サブリーダー」の存在と多様性の確保のために「際」の概念の重要性が提起された。

今回、3年ぶりとなる対面形式により全国大会が開催され、共通論題(2)がつつがなく行われたのは、大会の円滑な運営に献身的に取り組まれた岡田浩樹実行委員長をはじめとする実行委員各位の尽力の成果であり、深甚なる謝意を表する次第である。

【共通論題3】アドボカシー・デモクラシー・多文化共生　国際文化学からみた高橋良輔の学問的意義

芝崎 厚士（代表）、馬場 孝、大山 貴稔、西海 洋志

本共通論題は、２０２１年３月に逝去された高橋良輔会員（青山学院大学）の学問的意義を、国際文化学の観点から検証することを目的として開催された。高橋氏は、数多くの学問・教育・実践面での業績を遺されると同時に、本学会の常任理事などを歴任され、文化交流創生コーディネーター制度をはじめとする学会のさまざまな活動に大きく貢献された存在であった。そこで、その活動の多様性を俯瞰的に理解するために、アドボカシー、デモクラシー、多文化共生の３つのキーワードを設定し、２つの報告を設けた。

第１の報告「引き裂かれた国際協力NGO　アドボカシー活動を取り巻く政治空間の伸縮」は、大山貴稔会員（九州工業大学）によるものである。大山会員は、高橋氏の考察をグローバル化を空間・時間・運動・ネットワークの観点から問い続けてきたとみなし、統治の正統性根拠を理論的に問いつつ、アドボカシー系NGOで活動しながら、これらの理論と実践を国際文化形成の萌芽とみなして体系化しようとしたのではないか、ととらえる。そして２０１０年代以降の、それらの活動が国家へ「再埋め込み」されていう過程を現場で体験していく中で、トランスナショナルな公共圏の存立基盤を問い直そうとしていったのではないかと論じるものであった。

第２の報告「公共性の再構造転換？　アドボカシー・ポリティックスと国際公共性の再考」は、西海洋志会員（聖学院大学）によるものである。西海会員は、高橋が展開したアドボカシー論に着目し、学生時代からJANICでの調査研究・政策提言とハーバーマスを中心としたポスト・ナショナルな主権論という、実践と理論の双方に取り組んできた高橋の根源には「社会的なるもの」への関心があるとみなす。その上で、NGOがナショナルな公共性へ影響を与え、いわば「触媒」としてそれを活性化することで、国際公共性を形成するという、「構造転換」の役割を果たすことで、ハーバーマスを踏まえつつもそれを超えていくような、ナショナルな公共性のトランスナショナル化を担うと考えていたと論じるものであった。

司会の馬場会員（静岡文化芸術大学名誉教授）、コメンテーターの芝崎会員（駒澤大学）から、報告者の論点への補足が為された後、フロアからも多くのコメントや質問がなされた。本共通論題は、研究、実践の双方において高橋氏が遺された数多くの成果の一端を検証したものであるが、報告・討論・質疑において見出されたさまざまな論点を継承していくことによって国際文化学をさらに発展させていくことが、我々の今後の課題となろう。改めて、高橋氏に謹んで感謝の意を表するものである。

自由論題A　「日本と近現代」
ウィルソン・エィミー（司会）、Theo Slogar、白石 佳和、渡邊 剛

Theo Slogar（龍谷大学 国際文化研究科博士後期課程）

Internationalization at Japanese Universities: The Challenges of Reforming “Insular” Organizational Practices

The aim of this study was to examine (1) Japanese universities rationales for pursuing internationalisation, (2) the organisational and bureaucratic roadblocks stymieing internationalization on the ground, and (3) the impact of governmental policies aimed at globalising Japan’s higher education sector. To answer these questions, a multi-case study was conducted at 8 universities where interviews were arranged with a total of 38 faculty members and administrators.

The data analysis suggests that internationalisation at private, non-elite universities was primarily a form of domestic branding to attract high school students amidst Japan’s declining 18-year-old population. Private universities’ strong financial reliance on Japanese students’ fees, along with perceptions of international students as a financial loss, meant that internationalisation was not given high priority at private, non-elite universities. Meanwhile, highly consensual decision-making practises revolving around committees and faculty meetings worked to entrench narrow departmental interests at the expense of broader organisational goals. These issues were compounded by poor access to governmental funding for internationalisation, as these institutions lack the know-how and the resources to meet the high numerical targets expected by the Ministry of Education (MEXT).

With better access to governmental funding and an already established internationalization infrastructure, elite national and private universities were slowly internationalising as evident by their wide variety of study abroad, English-medium, double- and joint-degree programmes. Despite the growth in program numbers, however, the data indicates that many issues pertaining to governance, administration, and pedagogy were left largely unaddressed. Firstly, the over reliance on numerical targets as measures of success in governmental policies meant that attention to the qualitative aspect was lacking at most universities. Furthermore, akin to the non-elite private universities, central administration at many elite national and private institutions was unable to overcome strong departmental resistance from the faculties.

In conclusion, it is argued that governmental internationalisation policies in Japan are exacerbating already strong hierarchical disparities in the higher education sector, with a few elite universities slowly going international whereas less prestigious institutions lack the resources to pursue internationalisation in any meaningful way.

白石佳和（高岡法科大学 准教授）

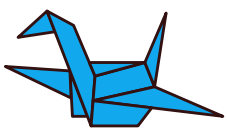
なぜ日系ハイクの俳人がブラジルハイカイに進出したのか
―雑誌『雪』『PORTAL』との関わりから―

ブラジルでは、20世紀初頭以来、フランス経由のブラジルハイカイと日本移民が持ち込んだ日系ハイクが並立して活動が行われ、さらにその後、日系ハイクの伝統俳句の考え方がブラジルハイカイに持ち込まれるというトランスカルチュラルな展開があった。それが、グレミオ・ハイカイ・イペー（以下イペー結社）の活動である。イペー結社は日本の俳句結社のように、毎月の句会や季語研究、雑詠撰集、歳時記作成などを行った。本発表では、イペー結社の中心人物である日系一世増田恆河が参加していた新潟県の俳句雑誌『雪』の記事をもとに、恆河がブラジルハイカイと関わるようになった経緯について分析した。その結果、1980年代に増田恆河が俳句の師や句友を失くし俳句の将来を憂いていたこと、『雪』の主宰村松紅花からブラジルハイカイについての文章を書く機会を得たこと、ポルトガル語のハイカイに将来性を感じていたことがわかった。移民が文化の変容を促す役割を担った好例である。

渡邊 剛　（早稲田大学 アジア太平洋研究科 博士後期課程）

日本近代化への歩みに対する知識人の警鐘
―朝河貫一を中心に―

日本近代史の歩みに対する、知識人四人の警鐘を検証し発表させて頂いた。朝河貫一（1873~1948）、吉野作造（1878~1933）、石橋湛山（1884~1973）、清沢洌（1890~1945）はそれぞれ生い立ちも活躍した舞台も異なるが、明治から昭和に至る日本の歩みを冷静に見つめ、帝国主義、覇権主義政策をもって朝鮮半島、中国大陸等に侵攻する日本の歩みに警鐘を鳴らし続けた真の愛国者であった。彼らに通底する思想基盤は、「佐幕派出身」、「儒教とキリスト教の影響」、「国際性と平和思想」であり、彼らの指摘した日本の問題の核心は「国民教育の改善」、「軍部の政治介入と政治の劣化」、「国際的視点の欠如」であった。残念ながら、彼らの声が当時の日本政府を動かすことはなかったが、太平洋戦争に敗れ廃墟となった日本の戦後復興に直接間接に取り入れられ、日本は民主国家として甦った。



自由論題B　戦争・平和・価値創造
大形 利之（司会）、鍋島 孝子、阿部 純、大和 裕美子

自由論題Bでは、戦争・平和・価値創造というテーマで、３人の発表者によるそれぞれに深み、重みのある発表が行われた。以下、発表順に議論を報告する。

まず、鍋島孝子（北海道大学）会員による「近代性の克服－アフリカの文化とローカルナレッジへの偏見と差別の根源」と題しての発表である。鍋島会員は「国際政治経済の構造の中で、アフリカの文化がいかに軽視され蹂躙されてきたかを歴史的に検証する」として、「何を基準にアフリカの文化を劣等だと判断したかというと、それは近代化と工業化の効率性や合理性であった」とする。生産効率が悪い集団は劣った人種や文化であって野蛮だと見なし、脅威と侮蔑の対象とされた。画一的な開発目標は、エリートと、開発から周縁化した農村の住民との格差を生んだ。アフリカの開発エリート達は、農民や大衆を国民国家建設と権威主義的に動員し、その文化や伝統的価値を抑制してナショナリズムを養成した。今日、多様性を認め、人種的・文化的差別をなくそうとの世界的な運動が活発になってきているが、この近代以来の偏見の根源を理解し、産業構造自体を見直さなければ、それは達成しないとした。

次に阿部純（東北大学）会員による報告『戦争記憶と日系人表象―「モデル・マイノリティ」言説と「日本人論」の関連性に注目して―』において、『読売新聞』を取り上げながら1980年代日本におけるアメリカ日系人表象の内実を検証した。阿部会員は『読売新聞』がアメリカの「モデル・マイノリティ」言説を受容しながらも、そこに「血」や「サムライ」といった言葉を使いながら日系人と日本人のつながりを見出し強調したことを明らかにした。その背景には当時興隆した「日本人論」や日米貿易摩擦があったという。しかし大河ドラマ『山河燃ゆ』の米国での放映無期延期によって、そのような日系人表象に変化が生じたことも指摘された。報告後の討論では、日本における日系人表象をトランスナショナルな観点から捉える重要性が提示された。フロアからは考察対象や米国での『山河燃ゆ』の放映延期の経緯などに関して質問が出された。

最後に大和裕美子（九州共立大学）会員による『「非核都市宣言」と草の根における平和問題－「岡垣町核兵器廃絶平和の町宣言」を事例に』と題して発表が行われた。運動から40年が経過したいま、あらためて非核自治体宣言とは何だったのか。各自治体においていかなる背景のなかで何が契機となり、「非核自治体」となっていくのかという問いが提起され、本報告では福岡県遠賀郡岡垣町を事例に、宣言までの過程が報告された。

岡垣町では1983年に非核自治体宣言を求める３つの請願が提出されながらも、宣言には至らなかった。背景には、自治体で非核宣言をする意義が疑問視する声や、自民党（系）議員の反対があった、と述べられた。1986年には町長が主役となって決議や宣言を出す方式で議論され、宣言が決定された。背後で続けられていた宣言の署名運動と町長への働きかけや地域的平和問題とその運動の経験、政党・町職員・労働組合員・平和運動家の要素を持ち合わせる人物の活躍があったとされた。

自由論題C　社会を再建・構想する
湯浅 拓也（司会）、菅野 敦志、葉柳 和則

自由論題Cでは、「社会を再建・構想する」というテーマの下に、2つの報告が行われた。

第1報告は、菅野敦志会員（共立女子大学）による「剣とペンと台湾引揚者―松川久仁男にみる戦後沖縄の再建」であった。同報告では、米軍統治下の沖縄で剣道を復興した保守の論客であったと同時に、台湾引揚者でもあった松川久仁男（1909～1999年、沖縄県剣道道場連盟会長、県剣道連盟顧問を歴任、剣道八段範士）について検討がなされた。とりわけ、東京、台湾、そして敗戦後の引揚げを含む松川の体験が、戦後沖縄での剣道復興および言論活動―「剣（剣道家）とペン（ジャーナリスト）」―にいかにして連続していったのかに着目して考察が進められた。沖縄から国士舘に学び、台湾渡航後は記者として新聞社に就職、その後台北商業学校で専任の剣道教師となった松川は、戦争末期には補充兵を経験し、終戦後に沖縄に引揚げると「剣とペン」の両刀使いとして活躍した。松川は、大国のあいだで生き抜く戦略として、“負けるは勝ち”という「敗戦の学問」に徹した。台湾という“外地”を経験した松川の越境経験には、勝敗の結果に忠実に生きたリアリストとしての剣士の一面と、変化する時代と環境に適応しながら生存を図ろうとした柔軟さの両面が垣間見えるものであった。

第2報告は、葉柳和則会員（長崎大学）による「全体主義に抗する全体主義？―第二次世界大戦勃発期のスイスにおける社会構想」であった。同報告は、戦間期から戦後にかけてスイスの内務大臣を務めた、フィリップ・エッター（1891～1977年）が、オーストリア併合の前夜に行った講演を資料として、彼の「国土防衛」思想が全体主義と境を接する地点に光を当てる。エッターの社会思想の根底には教皇が発した「社会回勅」があった。回勅は自由主義と社会主義を批判した上で、コーポラティズムを解決策として提唱した。この社会思想は全体主義とも親和性が高く、エッターもまたそこから自由ではない。他方で彼は、諸州の自律と宗教的固有性の承認に基づくスイスの連邦制は、全体主義と相容れないものであることを強調する。結果としてエッターは、スイス固有の社会・文化的諸構造を全体主義から防衛するためには、軍隊に身を投じ、個を全体に従属させることの必要性を必須要件とするパラドクシカルな社会構想にたどり着く。これが第二次世界大戦期にどのように現実化していくのかを確認することが今後の課題である。

両報告に対しては、フロアから多くの質問が寄せられた。菅野会員に対しては、松川が学生時代をおくった国士舘、松川が教師としてかかわった台北商業学校、戦前から戦後にかけて揺れ動く松川の人物像などをめぐって議論が行われた。葉柳会員に対しては、エッターをはじめとするカトリック保守主義の知識人、当時の「ヨーロッパ的価値」をめぐる評価、レジスタンスと敵対的文化触変の関係性について議論が行われた。

自由論題D　ジェンダーとメディア
杉村 美紀（司会）、齋藤 大輔、呉 程穂、山田 直子

自由論題Dでは、メディア表象における文化的・社会的意味を、それぞれ異なる視角から問う3件の発表が行われた。

齋藤大輔会員の「称賛されるニッポン―東京2020夏季オリンピック関連報道を事例として」は、2020年夏に1年遅れで無観客という状況下で行われた東京オリンピック関連報道を事例に、「ニッポン（文化）」に対するメディア表象を分析した研究である。齋藤は、参加選手のSNSや外国メディアにおいて、選手村の食・住環境やコンビニ、ボランティアの対応について「日本文化」が称賛されたことは、単に一方向的なものではなく、日本側の報道においても、そこにみられる「他者のまなざし」を流用し、「日本らしさ」とリンクさせ、「おもてなし」の自己評価を行った「自己表象」のプロセスがあったことを指摘した。そして、日本国内のメディアにおいては、競技というオリンピック本体以外の部分で、レガシーとして意義付けられる「文化」が、外への発信とともに内において再認識される文脈があることを明らかにした。

呉程徳会員の「日中のテレビドラマにおける独身女性表象―『問題のあるレストラン』と『歓楽頌』の比較から」は、日本と中国で共に増えている晩婚化や未婚と、その背景にある結婚を選択的行為ととらえる社会的背景を踏まえ、両国のテレビドラマにおける独身女性の描かれ方を分析した研究である。筆者の視角は、文化表象や社会表象は、それが生み出される社会・文化的過程であると同時に、生み出された表象が社会や文化を作り出すという双方向を特徴とする。

この観点からマルチモダリティ・ディスコース分析を用いて、ドラマのシーンでのフレーミングや登場人物の服装や振る舞い等に注目し、男性優位社会による支配と抵抗、個人的意識の目ざめ、恋愛に対する期待、結婚に対する期待、伝統的な家族観のとらえかた、金銭的・物質的なものに対する期待という点で、日中の独身女性の表象には差異があることを示した。

山田直子会員の「国際的な音楽交流における仲介者の役割―テレビマンユニオン制作の音楽ドキュメンタリー番組を事例に」では、国際文化交流における「仲介者」の役割に注目し、国境や社会体制の違いを越えて文化がつなぐ交流の意味付けを行った。山田が取り上げた事例は、1983年にテレビマンユニオンが企画した中国のピアニストと台湾のバイオリニストによる「二人の約束」コンサートである。「仲介者」の役割は先行研究でも論じられているが、本研究では、ディレクターやプロデューサーへのインタビューや関連資料の質的分析を通じ、政治的体制の違いを越えて芸術家をつなぎ、音楽という共通言語を通じて「相互理解」を深めるに至ったプロセスを明らかにした。また音楽交流が平和活動に寄与できることを、音楽交流をめぐる複数の事例を通じて論じることで、国際文化研究がもつ射程をより幅広く普遍的なものとして提示している点も注目される。

自由論題 E　移住・移民
目黒 志帆美 （司会） Meline Mesropyan、崔 紗華、山本 悟

本セッションの第1報告はMeline Mesropyan（東北大学）会員のArmenian Refugees in Early 20th c. Japan（20世紀初頭の日本におけるアルメニア難民）であった。本報告は、オスマン帝国によるアルメニア人虐殺（1915–1923）を逃れ、シベリア鉄道でロシアを横断し、1915年から1930年にかけて日本に渡ったアルメニア難民を対象とするものである。本報告では、アルメニア難民が日本への入国の際に所持していた各種旅券をめぐる状況を分析したうえで、当時の日本の外事警察による渡来渡航の外国人に関する統計を、アメリカ国立公文書館所蔵の乗船客名簿に記載された難民数と比較し、現在明らかになっている難民数（およそ500人）より多くのアルメニア難民が日本を経由していたことが指摘された。

第2報告の崔紗華（同志社大学）会員による「在日朝鮮人の国際移動に関する史的考察―権利と「許可」の狭間で」では、在日朝鮮人の中でも「北朝鮮系」とみなされた朝鮮籍者に対し、いかに日本への再入国許可が与えられたのかを問うものである。従来の研究では、主に法学や社会学の分野において、日本国内における再入国許可制度の歴史的変遷や、制度に対する抵抗運動の成果が論じられてきた。それに対し、本報告は在日朝鮮人をとりまく国際関係に着目し、日本政府が再入国を「許可」することに踏み切った要因を考察したものである。本報告では朝鮮籍者に対し、再入国を不許可とし続けることが、かえって日本政府にとって国内政治上、外交上のリスクとなることが示された。

さらに、1970年代に進展した冷戦のデタントの影響を受け、日本政府が朝鮮籍者に対する再入国を許可せざるを得ない状況に置かれた点が指摘された。

第3報告は、山本悟（山口県立大学大学院生）会員による「『テレワーク移住』へと連なる『逃れる』と『求める』の諸相―『ライフスタイル移住』の変遷から考える」であった。「ライフスタイル移住」を考察対象とし、移住を不動産取引の集合体と捉える視座から国内でのヒアリング調査結果を踏まえた分析結果が報告された。本報告では、失われた20年に活発化した①「海外ライフスタイル移住」、東日本大震災前後から増加した②「地方への田園回帰」、コロナ禍で表出した③「テレワーク移住」への変遷をたどったうえで、移住の目的が「逃れる」から「求める」ものへと変化するとともに、人生や生き方に対する「リセット感」が近年希薄化した点が指摘された。テレワーク急伸に起因する居住地選択の広がりによって、移住を人生の決断が伴う「特別なもの」から、「単なる住み替え、引越し」に変容する一方で、生活の質や快適性を求める「街の居心地」は、場所や時代が変わっても「ライフスタイル移住」の主要因として残存している点が指摘された。

3報告は「人の移動」にかかわる研究であり、いずれも新たな視座を提供する斬新かつ意欲的な研究内容であった。報告者の今後ますますの研究の進展を祈念したい。

自由論題F　芸術とヴィジョン
趙 貴花（司会）、田中 佑実、曽 小蘭、高橋 梓

本セッションでは「芸術とヴィジョン」と題して、３つの報告が行われた。

第１報告は、田中佑実氏（北海道大学）の「1900年パリ万博ルイユに見るアクセリ・ガッレン＝カッレラの選択」であった。同報告は、1900年パリ万博のフィンランド館において出品されたルイユ（ryijy）というタペストリーに着目して、フィンランドを代表する芸術家の一人であったガッレン＝カッレラがパリ万博のために選択したのは、「文明/野生」「中央/周縁」「西/東」「絵画/工芸」の枠組みを意識した西洋の文脈の中で形成されたフィンランドらしさを示すものであったと述べられた。質疑応答では、フィンランドの内なる多様性や19世紀以降のロシアとの関係の中での民族的アイデンティティの醸成、日本文化がガッレン＝カッレラに与えた影響、フィンランドの言語とアイデンティティの関係などについて説明された。

第２報告は、曽小蘭氏（東北大学）の「鄭伯奇の革命文学観について：『帝国之栄光』と『軌道』を中心に」であった。同報告では、中国近代の小説家・劇作家の鄭伯奇が1920年代に国民文学から革命文学へ転向した際の思想の変化について考察したものである。すなわち、鄭伯奇が国民文学において「国民」というカテゴリーを設けることで、中国の無産階級者と資産階級者の統合を提唱したことから、階級闘争理論を用いて、資本主義や帝国主義に反抗する革命文学へと転向していたことを示した。質疑応答では鄭伯奇の用いた「世界人」という言葉の意味について議論が行われた。

第３報告は、高橋梓氏（近畿大学）の「変容不可能な文化要素としての「永遠」の主題：プルーストのボードレール需要に基づく文化触変モデル理論拡張の試み」であった。同報告は、小説家プルーストの文学作品におけるボードレール的永遠性の受容と展開を辿り、ラスキン批評との接続を試みることで、文化の呪縛に対峙する個人の精神における文化の変容可能性の射程を考察したものである。高橋氏は、平野健一郎顧問の文化触変モデルにおいて新たな文化の受容は「旧平衡」の文化要素による「抵抗」を経て「再解釈」されるのに対し、その「再解釈」から到達する「再構成」に「創造」の文言を付け加えることを提案した。すなわち、「『ことば』を、旧平衡の現実世界に相当する新たな世界の創造のための仲介者として価値づけることこそが、『不変の与件』の呪縛を超越し、文化の変容不可能性から脱するための条件となる」と述べられた。質疑応答では、「無意志的想起」と「虚構」、「ことば」との関係、そして検証方法について議論が交わされた。

以上、本セッションの３報告は、芸術作品や文学作品の分析から民族的アイデンティティの表出、知識人の思想の変化、文化触変モデル理論の拡張の可能性を提示し、示唆に富む興味深い内容であった。

自由論題G　文化交流・文化外交
芝崎 厚士（司会）、藤田 賀久、齋藤 絢、坂口 可奈

自由論題Gでは、藤田賀久会員（多摩大学）、齋藤絢会員（名古屋外国語大学）、坂口可奈会員（北海商科大学）による、文化交流・文化外交に関する報告が行われた。

藤田会員の報告「戦前期の奈良を舞台とする「広報文化外交」　海外要人の訪問先から見える日本の自画像」は、近代における日本の自己イメージが投影された場として「奈良」をとらえて、奈良にさまざまな「要人」を招聘することによって、日本の自画像を発信しようとした試みを、丹念に実証的に検証するものであった。仏教を軸に据えてアジア諸民族の結節点として奈良を捉える「仏教アジア主義」的な訪問、春日大社、東大寺、興福寺などを主要な場とした１９１０年代、さらにリットン調査団から「満州国」の要人などの訪問が増加する１９３０年代、１９３５年の溥儀の訪日などを検討した上で、１９４０年代に入ると仏教寺院が除外され、橿原神宮、天武天皇陵が追加されるといった変化をたどる内容であった。

齋藤会員の報告「韓国民衆歌謡が映し出す文化的表象性　朝鮮半島の南北関係」では、現地調査、インタビューなども踏まえた実証的な検証を基礎にして、９０年代後半以降韓国で広く定着してきた「民衆歌謡」を、民主化運動の中で形成された抵抗文化として捉えて検証するものであった。民衆歌謡歌手ベクジャ、民衆歌謡歌手グループウリナラへのインタビューと、その背景にある韓国社会、市民の変容を踏まえて、民衆歌謡の文化的表象性や韓国文化の多様性を明らかにしようとする試みであった。

坂口会員の報告「シンガポールにおける自国像形成　インターナル・ブランディングの観点から」は、他国への自国像の発信ではなく、教科書における国民向けの自国像の発信を読み解くことで、シンガポール政府が形成したい自己イメージの変遷を検証していく内容であった。内側の国民統合の側面から、いわば国内に於ける「国民」的な文化を支えていくための試みを検証するアプローチは、シンガポールの独自の歴史的な文脈が持つ固有性を理解する上で、有益なものであるといえよう。

以上のように、本自由論題では、それぞれの国民国家の「自画像」の形成と変遷に着眼することで、文化の交流がもつ意義を検討するという意欲的な研究が提示された。フロアからも積極的な意見交換が為されており、本提題に対する関心の高さを伺わせた。今後は、こうした国民国家単位での文化の形成と交流と併せて、必ずしもそれに回収されないような、トランスナショナル・グローバルな重層性や多様性を踏まえた考察が加わっていくことによって、対象としている現象がもつ多義性を複合的に解明することも望まれよう。というのも、文化をめぐる自己イメージは常に、提示したい、理解させたい、形成したいと思う側の意図通りにはなりきれず、国民・国家＆文化によっては整理しきれない部分が存在しうると思われるからである。

自由論題H　家族・記憶・建築
川崎 賢一（司会）、相原 征代、月野 楓子、斉藤 理

自由論題 H は、第1日目の午前の前半部分・ E401 教室で行われた。全体のテーマは、「家族・記憶・建築」であり、主要概念間に大きなつながりはないが、比較の観点から、批判的なスタンスで行われ、3つの報告に関して、どの発表に関しても活発な議論が行われた。その概要を発表順に整理しておきたい。

第1発表は、相原 征代（北陸大学・准教授）氏によるもので、「家族の外部不経済 ＜社会的共通資本＞としての子どもと資本主義の＜影（シャドウ）＞についての考察」というものであった。ただし、最初の報告予定では、「― 現代社会の「家族」の限界を考える ―」というサブタイトルで、本発表では、より対象を絞ったものであった。」経済学の重鎮であった宇沢氏の＜社会的費用論＞やI.イリッチの＜シャドウ論＞等の考察をヒントにして、近代に＜精神的共同体＞として登場した＜近代家族＞を、＜外部不経済論＞を加えて、＜精神性＞の観点をいったん棚上げして、学際的立場から論じようとした。その意味で、大胆な試みであり、示唆に富むものであった。

第２発表は、月野 楓子（沖縄国際大学・講師）氏によるもので、タイトルは「沖縄移民と「よりどころ」 ―アルゼンチンにおける移民たちの紐帯と文化―」であった。第二次大戦直後における、アルゼンチンの沖縄移民社会の状況を、彼らの紐帯の＜よりどころ＞を丹念に明らかにしようとした。沖縄出身の移民について彼らの出身地の関係が強固且つ継続的なものとして具体的に説明があり、さらに、アルゼンチンにおける沖縄移民社会の概括的な歴史や沖縄自体との関連性にも配慮をした、貴重な報告となっていた。

最後に、第３発表は、斉藤 理（山口県立大学国際文化学部・教授）氏が、「建造物の「破壊と再生」過程と文化的記憶の在処をめぐって ―ベルリン王宮再建に関わる議論から考察する―」というタイトルで行われた。具体的な例として、ベルリン中心部にある＜ベルリン王宮＞ の30年間にわたる破壊と再生の過程(東ドイツ政府によりいったん破壊され、ドイツに統合された後に、市民などの働き掛けを考慮して、再生された過程)と、現在でも続いている再建の問題を通じて、文化的遺伝子としての歴史的建造物の持つ意義と、その際＜個を主体とした記念碑の構築手法＞とを関連付けて分析しようとした。極めて示唆に富む、様々な文化的建造物の保存や再生の参考になるように思われる。

繰り返しになるが、3つの報告はそれぞれ内容が異なることは言うまでもないが、その基本的な研究スタイルや研究方法には、オーソドックスな批判的・実証的な共通性があったことを付け加えておきたい。

大会アルバム

分科会では熱い議論がいつまでも続きました

神戸大学からの絶景

神戸大学の皆様、素晴らしい大会をありがとうございました！

初の理事交流会も企画されました

大学院生交流会報告

第21回全国大会で行われた大学生交流会の様子を葉柳会員にお伝えいただきます。

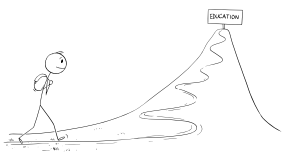
葉柳 和則（長崎大学、副会長）

今年の院生交流会は、新しい試みとして、交流会を通じて生まれたネットワークを生かして、翌年の全国大会での大学院生主体の共通論題開催というコンセプトで実施しました。学会の未来を担っていく大学院生が、専門分野や所属大学の枠を越えて、互いの対象、理論、方法を理解し、それらのあいだにつながりを見出していくことが、国際文化学という学際的研究領域を活性化するために必要だと考えたのです。これを具体的な研究成果につなげていくために「１年後の共通論題」という目標を設定しました。

オフィシャルには学会のニューズレターで告知し、会員宛のメールでリマインドするとともに、多くの院生会員を有する大学の教員に参加の促しをお願いするという方法で、参加者を募りました。その過程で参加者数をある程度早めに確定するための工夫が必要だと感じました。しかし、結果的には飛び入りも含めて13名の参加者があり、多すぎず少なすぎず、ちょうど良い人数に収まりました。コーディネーターは葉柳と加藤恵美先生（帝京大学）。他に木原誠先生が参加してくださいました。

まずはコーディネーターが今回の交流会のコンセプトについて説明し、その上でその後のグループ作りを想定して、参加者に自身の研究テーマ、理論、方法に力点をおいて話してもらいました。互いの自己紹介を聞きながらテーマあるいは理論・方法に関して自分と他の参加者とのつながりを見出してもらうのが理想だと考えていましたが、自発的にグループ作りがなされない場合も想定して、コーディネーターもメモを作っていました。しかし、これはうれしい杞憂に終わりました。自己紹介の後、グループを作って、今後共同研究を続けるとすればどのようなテーマが可能か話し合いに入りました。小さなホワイトボードを用意し、ブレーンストーミング形式で行ってもらいましたが、アクティブラーニング世代だけあって活発な議論が展開されていたのが印象的でした。大きくは4グループが形成され、「BL（ボーイズラブ）マンガにおける視覚表象と言語表象」、「中国・日本・ベトナムにおける人の移動をめぐる国際政治と社会運動からの考察」、「近現代の国民国家形成期における知識人と非知識人の役割」、「マルチモーダル分析の対象と手法、特に事実とフィクションの扱い方」について意見交換が行われました。

院生のみなさんには、共通論題を開催するための研究会に対する学会からの支援について再確認した上で、交流会は終了しました。今回は参加できなかった院生会員もメンバーに加えるなど、柔軟な形で研究交流が継続されることを願っています。これらのグループから、来年の学会における共通論題につながっていく共同研究が生まれるなら、今後の日本国際文化学会のひとつの柱へと発展していくはずです。



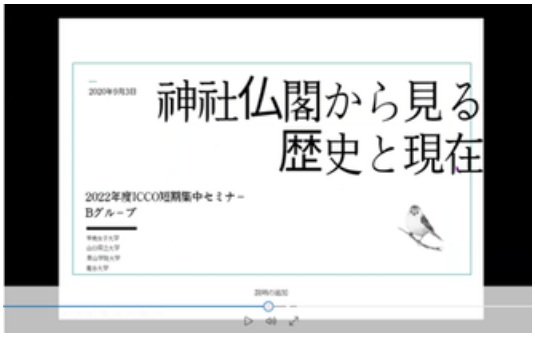
貴重な出会いの場となった大学院生交流会

2022年度ICCO短期集中セミナー実施報告

ICCO短期集中セミナー初のオンライン開催

2022年8月22日から9月3日までの約2週間、ICCO（文化交流創成コーディネーター資格）短期集中セミナーを開催いたしました。2019年度までは京都・龍谷大学や沖縄・名桜大学で実施していたセミナーですが、新型コロナウイルスの影響で2020・2021年度はやむなく中止となりました。2022年度は全国の参加認定大学からオンライン上に集まった参加者が、2グループに分かれてテーマを決めて報告するかたちで実施できました。初日は松居竜五事務局長によるオリエンテーションや岩野雅子資格審査委員長によるアイディアの出し方や修了報告書執筆についての説明があり、その後、都丸潤子会長や馬場孝幹事（前会長）、フィールドワークの方法の指導をしてくださった多摩大学の藤田賀久会員、倉真一常任理事、菅野敦志常任理事、小林文生顧問ら参加学会員による自己紹介がありました。さらに、参加者9名がそれぞれ自分の文化体験の紹介や取り組んでみたいフィールドワークについてパワーポイントを用いてプレゼンテーションを行いました。翌23日は多摩大学の藤田賀久会員によるフィールドワークに関する講演があり、その後、8名が参加してのグループセッションが行われ、この時には甲南女子大学の湯淺章子会員と中西知子先生もご参加くださいました。そして3日目の24日から各グループによるプロジェクト開始。倉真一常任理事、菅野敦志常任理事が各グループのアドバイザーとなり、9月3日の成果発表会まで継続して、学生に対して自身の研究の経験などをもとに親身に助言をしていただきました。
成果報告会までの中間発表として、8月28日には参加者と参加学会員による全体懇談会を開催しました。前審査委員長の岡眞理子顧問からも温かな応援をいただき、ここで出た疑問や助言をもとにさらに内容を磨き上げていき、9月3日の成果発表会の報告となりました。1班は「まちの中のことば」をテーマに、もう1班は「神社仏閣から見る歴史と現在」をテーマにそれぞれの班がオンライン上で息の合ったプレゼンテーションが行われ、それに対して学生からも今回のフィールドワークの経験を通じた鋭い質問を投げかける場面も見られました。

今回の報告には審査委員の岩野雅子委員長、飯笹佐代子委員、岡田建志委員が審査を行いましたが、2班ともいずれ劣らぬ結果となり、今回はベストプレゼン賞の選出を見送ることとしました。
参加者は9月末の修了報告書提出のために、さらに報告内容を深めていることだと思います。今回はオンラインで課題に対して各地で調査を行い、結果を統合していくという、今までとは異なる創造の過程を繰り広げるセミナーとなりました。従来なら同じ場所で膝を突き合わせて話し合えたことが、今回のオンライン開催ではぶつけ合うことができず、想像以上の困難があったかもしれません。このような中、今回も学会員の先生や参加校の教員の方々が学生の取り組みに伴走してくださいました。
私も、事務局として2015年度からICCOの運営に関わってまいりましたが、毎回、新たな参加者が新しい状況の中でチャレンジを続けていることに感銘を受けております。今回のオンラインという環境の中で参加学生や学会員の先生方の思いに接しながら運営に携わることができたこと、そして、無事に終えることができましたことに感謝したいと思います。これからも皆さんのチャレンジを応援してまいりますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（ICCO事務局　池田 悦子）



プレゼン資料。素晴らしいプレゼンをありがとうございます！

事務局からのお知らせ

『インターカルチュラル』のオープンアクセスに向けたご案内

第21回総会でご案内の通り、年報編集委員会は国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が運営する「科学技術情報発信・流通総合システム」（J-STAGE）を利用した『インターカルチュラル』の電子化、レポジトリ化作業を進めております。毎号24ヶ月間の会員限定閲覧（パスワードによる認証）を経た後、オンラインでのオープンアクセスが可能となる予定です。発行後24ヶ月を経過したバックナンバーにつきましても、順次オープンアクセスで公開していきます。

投稿規程（2022年7月2日改正）第7条に記載の通り、掲載された論文等の複製権と公衆送信権は本会に委託されておりますが、全てのバックナンバーを含めて著作権の帰属する著者の皆様に上記J-STAGEによるレポジトリ化ならびに24ヶ月後のオープンアクセスにつきましてご了承いただきますようお願い申し上げます。電子化及び電子的公開に際してご不明な点がございましたら、編集委員会（editorialboard.intercultural@gmail.com）までお問い合わせください。

なお、紙媒体による『インターカルチュラル』は今後も出版を継続していきます。引き続き『インターカルチュラル』への積極的なご投稿と編集作業へのご協力をお願い申し上げます。

名簿アンケートご提出のお願い

学会会員名簿の回答がお済みでない会員様はご回答をお願いいたします。詳細はメーリングリストにてご案内しております。不明な点などあれば学会事務局へお問い合わせください。

問い合わせ先：学会事務局（jsics@world.ryukoku.ac.jp）

研究会募集のお知らせ

本学会では、研究会を助成しています。会員ならどなたでも応募できます。申請金額は10万円まで（単年度で1－2件程度）、申請方法は学会WEBページ（jsics.org/application.html）より様式をダウンロードして学会事務局宛に提出して下さい。常任理事会で決定し、結果をお知らせします。研究会の実施期間は2022年度末までです。その他、申請書に記載した３点を条件とします。

① 学会員同士の学術交流を主たる目的とする研究会であり、学会員が支部研究会を開催するような意識をもって申請することとし、他の団体等が主催する場合は共催として「日本国際文化学会」を明記し、会員が参加できるよう周知すること。

② 学会メンバーの研究・交流・発信活動を支援するものとし、非学会員の講演等が主となるような場合には、そこに学会メンバーも参加をするプログラム（報告、対話、ラウンドテーブル方式による議論等、様式は自由）を用意すること。

③ 開催前に国際文化学会ニューズレターおよびホームページの研究会開催コーナーにおいて周知することを了承いただき、また、開催後1か月以内に400～800字程度の報告書を提出し、これを学会ニューズレターおよびホームページで報告することとすること。

応募先/問い合わせ先：学会事務局（jsics@world.ryukoku.ac.jp）

会費納入のお願い

2022年度の年会費の納入をお願いいたします。一般会員：10,000円、大学院生：5,000円、学部生：2,000円
◆ゆうちょ銀行からお振込みのとき◆記号番号　00920-8-325835 日本国際文化学会（ニホンコクサイブンカガッカイ）
◆ゆうちょ銀行以外等からお振込みのとき◆ ゆうちょ銀行　店名〇九九　店番099　当座預金　口座番号0325835

【編集後記】

三年ぶりの全国大会対面開催に思わず涙が出てしまいました。実行委員会の皆様、ありがとうございます。編集者の高橋は、研究・教育活動の一環として近畿大学付近の障がい者福祉施設でボランティア授業を行っています。ご関心のある方はぜひ一緒に教壇へ！

障がい福祉施設ノーサイドでフランス語教育！